

対馬歴史民俗資料館報

第10号
昭和62年2月

編集・発行 対馬歴史民俗資料館
 長崎県立対馬歴史民俗資料館
 対馬市栄町6-23
 郵便番号 817
 郵便番号 (09205)-2-3687
 印刷所 昭和堂印刷
 長崎県対馬市栄町6-23
 昭和堂印刷
 電話 (0958) 21-1234

宗星石

津江篤郎



横134.0cm 縦59.5cm
厳原町豊泉院蔵

宗星石は本名は重望、外に千里、幾郷、白雲山樵、小雲山房主人、疎雨亭等の多くの号がある。旧対州藩主三十五代目にあたる。伯爵従二位貴族院議員。大正十二年東京にて薨去。五十七才。東京下谷養玉院墓地に葬る。

現在出版されている美術年鑑、明治以降の物語作家の中に、富岡鉄齋を筆頭に南画家 宗星石をみる事が出来る。美術界において、年鑑の厳しい選に入ることは容易でないことは勿論である。しかも見たすところ対馬出身者では只一人である。対馬では、まずこの記録を破ることは不可能に近いものと思われるが如何であろう。

宗武志著「春庭楽」に星石公の紹介がある。

「父はなかなかの腕前で、篆刻を桑名鎮城に学び、南画を大倉雨邨に学んだ。書は誰を師としたか聞き及んでいないが、先人諸家に挑んだことは確かだ。晩年は黄山谷に似た六朝風の趣をみせた。また漢学の素養なみなみでなく、画と詩と書とがそろって秀でていたと言われた」とある。私は多数の見事な印刷作品を宗家でみせていただいたが、大事に遺されていることを知った。南画は画と詩と相俟って一種の総合芸術を構成するものであるが、画や書だけのものも対馬のあちこちで拝見することができ、その度に心うたれるばかりである。公の仕事は当時から後の人達に大きな影響をあたえ、その亜流は今なお続いている。公の幼名を直丸といい、その時代の書作も遺っている。

南画家宗星石の記録は、管見のものでは、昭和三年平凡社発行の世界美術全集三十四巻に「天保九如図」とその解説がある。また昭和四年七周忌を記念して、滑川達、安達晴軒、三原徳谷（厳原出身東京在画家）らの肝煎りで、朝日新聞本社にて遺墨展が開かれ、その時の作品集「星石遺墨」一冊入り二冊がある。筆意非凡、珠玉の作品群である。現在、震災、戦災をのがれて、どれ程の作品が遺っているであろうか。

本館宗家文庫の漢籍の中には芸術に関する書籍が相当含まれており、特に美術についてのものが多い。これ等の美術書は中国朝鮮刊本のもの、日本刊本では明治大正時代に刊行されたものも多数ある。この美術書類は特に星石公が利用されたに違いない。なかに星石特有の達筆で、帙の内側に耐珍賞と記されたものがある。とにかく貴重な存在である。これ等の書物を見ると、日本南画は中国以来の厳しい師承や伝習にもとづいて興った訳でなく、輸入された画譜類による独学ではじまったといわれる所以が分るような気がする。そして、富岡鉄齋は「万巻の書を読み、万里の道を徂く」と言ったが、宜なるかなである。

美術全集解説に、星石は恬淡寡慾、風流多才の貴公子、画品従って高く、規模自ずから雄偉にして、職業画家と選を異にするところである。明治の末頃、再度中国に遊び親しくその風物に接し文墨の人々とも交際して帰ってからは一段の進境を示した。けれど現代南画の大家と称せられる人達といえども容易に到達し得ない境地であると、賞讃してある。また東京美術学校教授下村観山が、もし星石が画を業としたのであれば、玄人はさぞ難儀するであろうと嘆じたと伝えられている。

公の心境は古來中国の士大夫精神そのものではなかったかと思う。士大夫は俗物でなく、官にあれば高位高官となり、野にあれば、どうかすれば竹林の七賢ともなりえたのであった。士大夫は中国社会におけるエリート層であり、脱俗、自娛、反体制の境地に足場をもった人達であった。士大夫階級の出である文人画家は、非専門家でありながら、職業画家とはまた違った存在であった。これらの事實は、書画一致の士大夫文化を育て上げた中国ならではの現象であり、日本の風土では考えられないスケールの大きさがある。世の芸術家達は、その高邁な生き方を深く

学ぶべきではなからうか。

武志先生が幼少の時、宗家の後嗣に話が決つて、はじめ大森の邸で星石公に会われた。先生の御母様がこの子も絵が好きだからお手本を描いていただけならと御願いされたところ、公は絵というものは習うものではないよと笑われたそう。武志

口切りの茶事

長郷嘉寿

先生は、その意味を絵などはやめた方がよいと皮肉っておもしろく書いておられるが、実は南画の漢詩は近代の自由詩に、墨絵は油絵に変わっただけのことであった。その逞しい創造精神は武志先生に立派に受け継がれていったのである。

当館架蔵の検地帳や古い物成帳には、随所に茶園や茶についての記事が見られる。村々の年貢も畠方、田方、木庭方、茶方、椿森方に分けられていること、茶方とはお茶の収量に、椿森方とは椿の実(かたいし)の収量にかかわるものであることは周知のとおりである。

また、村々の給人(郷士)家に遺されている知行の坪付帳にも、多くの場合ながしかの茶の収穫高が「合(せて)茶何斤何拾目」と記され、且つ「上畠廻(し)何斗何何合」と、変換算の詩高が併せて記載されている。

「郷村帳」を調べてみると、三根、

吉田、仁位、小綱、田、卯麦、嵯峨、貝鮒、佐須奈の各村は、かつてはかなりの茶の生産があったとみえて、他の村々に比べると茶方の年貢高が多いから、地域的には昔の仁位郷と三根郷がその有力産地であったのであろう。

その頃は、これらの村々の里近くの木庭地には茶園が仕立てられ、そここの山合の木庭作跡地には野生茶がよく育ったので、この山茶も採集して茶がつくられた。古い時代の木庭作と茶の生産との関係には注意の要があるのであって、昔から日向の椎葉を始め木庭作が行われてきた所は、また良質の茶の産地でもあつた。

享保二年(一七一七)に対馬に渡った巡検使の記録のなかに、茶園について述べた部分があるが、「以前茶園之物成相定り候時節ニハ茶之直(値)段高く御座候て、茶園を請持候百姓の勝手に成り申たる由」とあり、更に「其以後ハ茶之直段以前の様ニ無御座、百姓共(中略)茶園を嫌い候勢ニ成り申候」と述べ、また「茶之木の検分は手間入(り)多く」その為実際に検分が出来ないので、茶園が多く「百姓の勝手の為に成り不申郷々ハ、公役銀之高に郡奉行了簡有之候而宜キ程申付置たる由」とある。つまり、旧来の茶園の年貢はその俣にして置いて、茶の出来不出来を勘案して、百姓の納める公役銀の高を調整していると述べている。それにしても、古くから茶の一部は商品として売られていたことが知られるのである。

ところで、宗家文庫の毎日記を読み進むと、十月頃には「口切りの茶事」の記事をみる事が出来る。茶の道の心得の薄い筆者には、それに就いて多くを語る資格はないが、記録の内容を伝えることは許されるだろう。そこで寛文四年(一六六四)一月二〇日の記事を紹介してみたい。

時の藩主の宗義真(天龍院公)は茶道の嗜みも深く、しばしば茶事の記録を遺している。また周知のとおり、朝鮮釜山の倭(和)館に、多くの秀れた燗師を送って釜山窯の名声を高からしめた。

さて、その夜の客は以酊庵の輪番和尚膳長老。御相伴は長寿院と長老の同宿仁首座並びに藩主の一族宗出雲守の三人。茶席は金石城内黒木書院の御数寄屋。

これに先立って一五日には以酊庵に招請の使者が立てられた。

ミ来ル廿日之晩、以酊庵へ御茶可被進之由被仰遣、御使者大浦作兵衛。必(ず)御出可被成との儀也。御相伴之儀長寿院、仁首座、宗出雲守へ被仰付ル。

翌日には、長老が招請の御札に直接参られた記事がある。

当日の記録は次のとおりの簡潔なものである。全文を掲げて置こう。

ミ膳長老江黒木書院之御数寄屋にて御茶被進、御相伴長寿院并長老之同宿仁首座及宗出雲守也。是ハ兼日方御案内にて如斯。

ミ今晚御数寄屋へ出候御道具之覚

一 御茶入 文琳

一 御懸物 無準

一 御茶碗 繪高麗

- 一 御花入 青磁大蕪ナシ
- 一 御水指 備前腰帶
- 一 御盆 庚 六角ナリ
- 一 御釜 あまづら
- 一 御香箱 庚
- 一 御茶杓 遠州
- 一 御羽箒 鶴

後段黒木書院にて出ル御座へ殿様出御、年寄中も罷出御挨拶申上ル。

翌日には長老自身御札に参られ、これに対して答札の使者が立てられたこと。三人の相伴人が前日の御札に登城したことを記して茶事の記事は終わっている。口切りの茶事についてはその時の書き手によって、「御壺の口切の御振廻」としたり「御口切の御茶」と書いたものもある。

さて、筆者は口切りの茶事の記事を読む毎に、前記したように当国でも古くからお茶が生産されたことと結び付けて、自国産のお茶を茶壺に詰めて保存し、やがて秋の頃に「口切り」をして賞味したものでろうと勝手に決め込んで来た。ところが最近になって、今まで見落していた記録のなかに、毎年茶道坊主が「宇治江御茶詰に」遣わされていたという一行程の記事があることに気付いた。

なんともうかつな話である。これによつて口切りのお茶は本場宇治の銘

茶であり、はるばると海を渡つてお茶詰に上つていたことを知った次第である。また「毎歳国分寺萬松院へ御茶壺を遣わし」ともあるので、多分宇治茶が進ぜられたに違いない。近頃意外な所で、古い茶臼のかけらを見ることがあるが、先日某寺でみごとな伝世の茶臼を拝見することができた。

前記した口切りの茶事のあつた年の春には、藩主宗義真は江戸から帰国の途中四月末に京都に着くが、この頃「殿様宇治へ御立寄被成候時、茶

師上林峯順、祝松仙より挽茶ヲ入れ候て進上候茶入之儀、今ニ返進無之」という記事があるので、或は先の茶事に用いられたお茶も、この時お供の茶道衆が茶壺に詰めて持ち下つたものだったのかも知れない。

茶席に出るお道具も、記録によればその度毎に名前が違つているので、決して同じものではないことが知られる。手許のメモからお掛物を拾つてみても「牧溪猿猴」とか「後陽成院筆」等というのがあることを記して置くことにする。

「磐座」考

磐座とは

『日本書紀』卷二、天孫降臨に、高皇産靈尊、勅して曰く。吾則ち、天津神籬及び天津磐座を起し樹て、吾孫の為に齋ひ奉らむ。とあり、これが「神籬、磐座の神勅」といわれるもので、神籬と磐座を相對して、祭祀の原点ともいふべき聖地として理解されている。

この天孫降臨神話には、日本における祭事の起原に関する故事が多く

永留久恵

語られて、天津神の祭礼と、宮廷儀式の本義が説かれているように思われる。

さて、神籬、磐座と一概にいうが、神籬とは、神靈の籠る聖なる森で、ヒモロはミモロと同義、キは木(樹林)とみられるが、籬の字をもって表現されるといふことは、竹でカキをした所とも考えられ、キは城とする説にもまた意義がある。そこで磐座とは、神の居座す聖な

る磐ということになるが、それに磐境、岩窟なども含めて、対馬の情況からこれを考察してみたい。

対馬の聖地信仰

対馬の在来神道における特色の一つとして、聖地信仰のことがよく知られている。それはテンドウという穀霊を祭る素朴な儀礼や、亀トを行う旧い伝承と共に、原始神道の本流を汲む民俗として、神道史研究上これが注目されたからである。

そこで島内各地の聖地をみると、その名称と祭祀形式から、およそ二つの類型に大別することができる。その一つは「シゲ」または天道茂と呼ばれる不入の森で、いま一つは通称「カナグラ」と呼ばれる聖域で、前者は神籬型、後者は磐座型という名称を呈したいと思うのは、カナグラとは神座に相違なく、その形式からして、まさに磐座という語感にふさわしい例をいくつもあげることができるからである。

対馬の神座

対馬の聖地を、シゲと呼ばれる神籬型と、カナグラと呼ばれる磐座型に大別したが、このカナグラはさらに磐座と、磐境と、岩窟に分類することが可能である。

磐座型には、積石または土盛りの

壇があつて、カナグラゲンと呼ばれる例があるように、実に神霊の居坐す壇に違いなく、磐座の名にふさわしい形と趣を呈している。また自然の岩石をもって磐座としている例も少なくない。

磐境型とは、自然石を野面に並べて、聖域を区画した中央に、粗い板石の祠がある例を見ることから、これをもって磐境という古語の概念に比定したものである。

岩窟型とは、自然の岩窟または岩陰に、神霊を齋き祭る形式で、山中あるいは川岸や海岸の洞窟にあり、なお海底にも、竜宮の門と称する岩穴があることから、これも水底の磐座と考えられる。ここで岩窟の最たる例として白嶽の形容を紹介する。

白嶽の岩窟

上臈の御嶽と並ぶ下臈の霊峰白嶽は、頂上の岩頭が二つに割れて、南を男岩、北を女岩と称している。その男岩の頭部は円くくびれて、あたかも男根の形を呈し、女岩は腹部に縦長の亀裂があつて、洞窟の奥に神が鎮まっている形容は、いみじくも女陰の形によく似ている。

この祭祀から連想される情景として、日本神話の天石窟、高句麗神話の隧穴神を思い浮べるのは、天石窟

に籠った天照大神が皇祖の女神で、高句麗の岩窟に祀られた女神（隧穴神）が始祖王東明の母だからである。対馬の天道信仰が、天童（男神）とその母神の祭祀を主としたものであることは、つとに「海東諸国紀」という異国の書に、対馬の天神は「南を子神、北を母神」と記している。

磐座の本義

磐座という概念は、神霊の居著く所、神の鎮り座す所、また神を招く所、神を齋く所で、要は神の座す磐という意であるが、私見では、このイワクラという本来の名義は、岩窟ではないかと考えている。それはイワクラという言葉のクラが、陰い洞窟を表現していると思うからで、以下それについて説明する。

対馬は天武朝に銀山が開発されたことから、銀山上神社と銀山神社と式内社が二座知られているが、その祭神は男神とも諸黒神、また室黒神ともされている。鉾山の神は金山彦というのが通例で、この諸黒神は解し難いといわれるが、私見では、諸黒のモロは御諸と同じで、それはヒモロに通じ、室黒となれば、ムロは窟にも通じるはず。クラはもちろんクラ（陰・暗）と同じ、これは銀山の坑内（岩窟）に祀られたことを窺わせると思うのだが、いかがであろうか。

またホコラ（祠）の語源をホクラ（穂倉）ではないかとした説に共感を持つのは、穀物を収蔵した高床の倉がまさに穂倉で、それは穀霊が籠る暗い空間であることから、穂倉と岩窟が共通のイメージで結ばれるからである。

穀霊が神となり、穂倉が祠となつて、神社、神宮となつて発展した形跡は、中国の南西山地（雲南）に遺る高倉と、わが南西諸島に遺る高倉、および弥生時代の遺跡、遺物から推定される高倉、そして伊勢神宮の神明造を通して窺われるところである。神殿はかならず暗い。神は暗い所に居著くわけで、人工の社殿が営まれる以前には、陰い森か岩陰か岩窟に鎮座したに違いなく、神殿の裏に自然の岩陰がある例がよくそれを示唆している。

また神籬はかならず照葉樹林の中にあるもので、落葉樹林には全くない。この伝統は現在の社叢にもよく継承されている。

しまいに、この暗い聖所が人体にも具えられていることを知るのには、マククラという秘所があつて、殊に新たな霊を籠らせる女陰には、岩窟の女神に通じる霊感があると信じられていたはずで、子宮という言葉がよくそれを表現している。